

設楽発掘通信

No.74
令和4年
10月号

秋の埋蔵文化財展 終了しました

八月三十一日（水）から九月二十七日まで、奥三河郷土館にて開催しました秋の埋蔵文化財展「悠久の記憶」は入場者二、四一八名の方々をお迎えすることができ、無事終了しました。ありがとうございました。

今回の展覧会は、設楽ダム建設事業に関連する発掘調査の成果を中心に紹介しました。通常の展覧会は、ガラスケース越しに見学していただきますが、今回は一部の展示品を露出展示でおこない、間近でじっくり観察できるようにしました。そのため見学者の方には、手で触れたいくなる場面もありましたね。いつか触れる展示コーナーを設けたいと思います。

開催期間中に四日間（午前と午後の二回）の展示説明会を行いました。毎回、多くの参加者の方をご案内いたしました。なかでも最終回九月二十四日（土）の午前は、四〇名を超える参加がありました。毎回、説明を終了したあと、参加者から多くの質問をいただき、皆様の埋蔵文化財に対する関心の高さを改めて感じました。参加者の中には、遺跡の調査した場所に両親がかつて住んでいた、あるいはご自身がお住まいだった方、群馬県や神奈川県など遠方からわざわざ展示を見学に来ていただいた方もみえました。

今回の展覧会は、発掘調査が終了し、発掘調査報告書を刊行した出土品を中心に紹介しました。現在発掘調査中の遺跡、未整理未報告の遺跡など、まだまだ公開していない出土品は数多くあります。今後、遺跡説明会、発掘成果報告会に加えて今回のように展覧会も計画していこうと思います。（永井宏幸）



図1 展示説明会の様子（8月31日）

大崎遺跡の発掘調査

大崎遺跡の調査は終了しました。さまざまな成果が確認されており、調査区ごとにご紹介していきます。

22A区では、集石遺構(図2赤塗)、水田関連遺構(図2緑塗と青塗)、縄文時代早期の遺構群(図2赤線)を確認しました。

まず集石遺構は平面形が約一〇m四方の方形を呈し、石を積み行為は数回にわたって行われていました(図2の①)。遺構の下部から中世の遺物が出土したことから中世より新しい時代に作られたと思われます。昨年度の調査をした小型の集石遺構とセットなのかもしれません。こうした遺構の例として中世の民間信仰の「十三塚」が相当し、豊田市足助町に類例があります。大崎遺跡で見つかっている集石遺構もこの「十三塚」に該当するのではないかと考えています。

水田関連遺構は、一辺三〜四mほどを主体とする小区画水田と水路で構成されています(図2の②)。水路は北側から一条、東側から一条の計2条確認されました。このうち北側からの水路は昨年度の調査で確認された水路につながっていました。水田関連遺構からは、縄文時代・弥生時代・古代・中世といったように幅広い時代の遺物が出土しました。中世の遺物としては山茶碗と伊勢型鍋を中心として古瀬戸や常滑の陶器片があり、これらは水田が使われていた頃の遺物と思われる。縄文時代中期〜弥生時代前期ごろまでの遺物は、水田関連遺構の下層に(あるいは前に)あった縄文から弥生時代の遺構や遺物包含層が壊されたものではないかと考えられています。縄文時代早期の遺構群は、調査区東側の斜面地で複数の土坑が確認されました。同一等高線上にある様で、陥し穴などの遺構であった可能性があります。また、その他の落ち込みからは、早期後半の土器(図2の③)と剥片が出土しました。

22B区では、昨年度検出された調査区南部の上層に④縄文時代中期から後期の遺構群、調査区東部の上層に⑤縄文時代後期の遺構群の補足調査と、さらに新たに下層遺構として⑥縄文時代早期の遺構群を確認しました。

まず上層の縄文時代中期から後期の遺構群は、調査区の南部に縄文時代中

期、北東部に縄文時代後期というように遺構の展開する場所が異なっていました。縄文時代中期の遺構群は、残りの二棟の重複を含め四棟の調査を行いました。うち二棟は残存状態が悪く、半分が失われていました。重複していた竪穴建物跡は綺麗に残っており、上の竪穴建物跡では石囲炉と思われる炉跡が、下の竪穴建物跡では複数の柱穴と壁溝と思われる溝跡が見つかりました。出土遺物は縄文時代中期後半ごろの土器片と石器類が確認されています。縄文時代後期の遺構は調査区の東部に展開していました。確認された竪穴建物跡は計七基でした。図6の⑤緑線で示した竪穴建物跡についてご紹介します。この竪穴建物跡は平面形は角丸の正方形(図8の白線)を呈しており、壁柱列(図8の橙線)と石囲炉(図8の赤線)を確認しました。出土遺物としては、後期中葉の土器片(図9)や石器類が出土しています。

次に縄文時代早期の遺構群は、竪穴建物跡一基と煙道付炉穴一基を確認しています(図6の⑥)。竪穴建物跡は約四m四方の方形を呈しており、南東側の壁面は失われていました。壁に沿うように柱を立てる壁柱列が確認されています。この竪穴建物跡に重なる様に煙道付炉穴が見つかっています(図10)。昨年度の調査では縄文時代早期の遺物の出土はほとんどありませんでしたが、今年度調査では遺物がま



図7 ④縄文時代中期の竪穴建物跡



図8 ⑤縄文時代後期の竪穴建物跡



図9 ⑤縄文時代後期の竪穴建物出土の土器



図10 ⑥縄文時代早期の竪穴建物跡(白線)と煙道付炉穴(赤線)

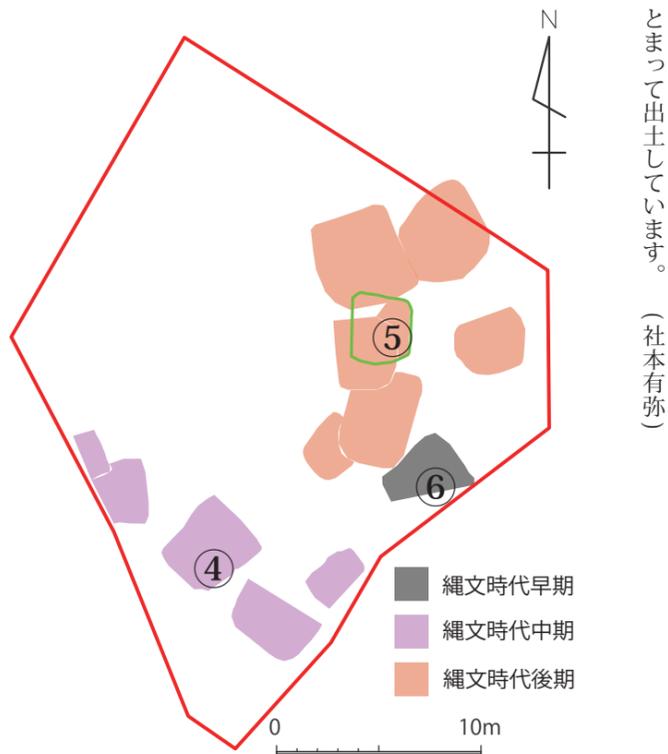


図6 22B区全体図

とまって出土しています。(社本有弥)



図3 ①集石遺構(南東から)



図4 ②水田関連遺構(南から)



図5 ③縄文時代早期の土器

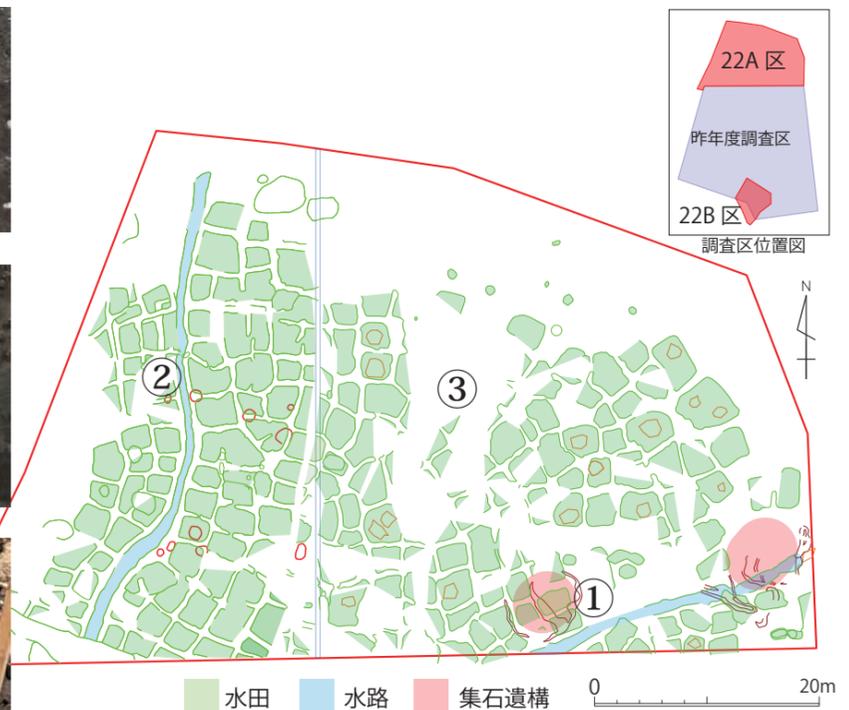


図2 22A区全体図

石囲炉の廃絶儀礼

縄文時代の竪穴建物跡は建物を廃棄する際にその建物をわざと燃やしたり、石を敷き詰めて配置した集石遺構を建物の上に作ったりする儀礼的な行為を行うことがあります。このような儀礼的行為は建物だけでなく、建物に伴う石囲炉にも行われることがあります。愛知県埋蔵文化財センターが行なってきた設楽ダム関連発掘調査でもさまざまな石囲炉の廃絶儀礼が確認されているので、ここで簡単に紹介します。

設楽町の縄文時代遺跡では石囲炉の廃絶儀礼は中期後半（五〇〇〇年前）から多く確認されます。一番例が多いのは図11のような、石囲炉を構築する炉石の一部を抜く行為です。炉石を抜く際は全ての石を抜くより、全体の半分から三分の一程の石を抜く行為が多いようです。次に多いのが図12のように炉の中に壊れた土器片を敷き詰める行為があります。これらの土器片は火にかけて焼けたような痕跡が見られないので、炉を廃棄した後に意図的に炉の中に敷き詰めて埋めていたことがわかっております。また設楽町では例は少ないですが、図13のように炉石に意図的にひびを入れ割る炉石の破壊行為も確認されています。縄文時代後期（四〇〇〇年前）になると、新たに石棒を用いた廃絶儀礼が加わります。図14は石囲炉の脇に立位で埋められていた石棒です。熱を加え破壊した石棒を廃棄した炉穴の脇に、廃棄した炉石の脇に意図的に埋められていたと思われる。

こういった儀礼的な行為は何の為に行われていたのかは、残念ながらはっきりとは分かりませんが、縄文時代中期後半から後期にかけて大きく増加する傾向は設楽町だけでなく、関東や東北などの多くの縄文時代遺跡に確認されています。この時期は集落が大規模な集落から小規模な集落に移り変わる時期でもあり、集落全体で行っていた祭祀が、各家で規模を縮小して行われていたとも考えられています。（渡邊 峻）



図11 炉石の抜取り【胡桃窪遺跡】



図13 炉石の破壊【下延坂遺跡】



図12 炉に土器敷
【上ヲロウ・下ヲロウ遺跡遺跡】



図14 炉石に石棒
【笹平遺跡】

設楽発掘通信

No.74 令和4年10月号

編集・発行

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団

愛知県埋蔵文化財センター

〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802の24
電話 (0567)67-4161【管理課】4163【調査課】

ホームページ <http://www.maibun.com>

Facebook <https://www.facebook.com/maibunaiichi>

Twitter https://twitter.com/aichi_maibun

印刷・協力

株式会社アコード

